



## スピード感のある研究開発の 必要性を考える

農研機構九州沖縄農業研究センター暖地水田輪作研究領域長  
大段 秀記（おおだん ひでき）

「スピード感をもって取り組む」とはよく聞く言葉です。スピード感をもって取り組まないといけない場合とは、競争が非常に激しく、早く成果を出さないと他者の成果により、想定された利益を喪失してしまう場合や早く成果を出さないと事態が悪い方向に向かっていく場合等が考えられます。我々が行っている農業技術開発は、まさにスピード感をもって取り組まないといけない分野であると最近強く感じています。

最近の枕詞のようにになっている「農家数の減少」と「極端な気候変動」は我が国の農業に突き付けられている非常に大きな問題と思います。ですが、この問題はここ数年に起きた現象ではありません。農家数は1960年頃から一貫して減っていますし、農家数減少の問題は以前から言われていたと思います。気候変動については、一昨年に「地球沸騰化」という言葉が使われましたが、温暖化は一昨年からはまった訳ではなく、1995年から国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）が開催されており、気候変動の問題は以前から議論されています。

では、以前はスピード感をもたずに研究開発が行われなかったのかというと、そんなことはなく、ずっと「スピード感をもった」研究開発は行われてきたと思います。ただ、以前の「スピード感」と今の「スピード感」が異なっているのではないかと思います。たとえば品種育成は10年以上かかります。どんなに良い品種であっても、品種になってから広く普及するまでに5年はかかるでしょう。現時点の「問題」に対応する新しい品種開発を一から始めたとすれば、それが普及するのは15年後、果たして15年

後の「問題」は今と同じでしょうか？おそらく、出来上がった品種では十分な対応ができないほど「問題」は大きくなっており、その時点の問題とのズレが生じている可能性が高いと思います。品種開発だけでなく技術開発でも同じことが言えます。おそらく、30年前ではそこまで大きなズレは生じなかったのではないのでしょうか。

私は1999年に農林水産省に採用されて、当時の九州農業試験場（今の九州沖縄農業研究センター）に配属されました。その頃は農家の方と話をすると、「試験場さんの研究は20年先を行っていて、今の俺らには必要ないかな」とよく言われ、農家の方から危機感もあまり感じませんでした。しかし、今、農家の方たちと話をすると「それは購入できるのか、いつ市販化されるんだ、どこで購入できるのか」といった声を聞くことが多くなり、中には「もっと速く作業ができないのか、もっと収量の多い品種はないのか」などの声も聞くようになりました。

現在の我々の研究成果は、ちょうど農家の方々のニーズに合ったものになっているのかもしれないかもしれません。しかし、農業現場の変化や気候変動のスピードがあまりにも速く、将来的に我々の研究開発がそれに対応できなくなるのではないかと危惧しています。次年度（2026年度）からは第6期中長期計画が始まるので、次期中課題の研究課題を考える必要があります。今の問題を解決するのではなく、5年後に起きているであろう問題を想定し、それを5年間で解決する「スピード感」が求められます。